



貨幣の世界

1

世界にはいろいろな国があり、その国ごとに貨幣があります。「貨幣の世界」では、さまざまな貨幣について、形やデザイン等に注目してご紹介します。第一回は古代から近世にかけてのオリエントからヨーロッパの貨幣の「形」についてご紹介します。

形 その1 古代オリエントから欧州

始まりの貨幣の形

そもそも貨幣はいつ頃からあったのだろうか？ という疑問は、「貨幣」とは何だろうか？ という疑問と同じように答えるのが難しいものです。

今から数千年前の古代メソポタミア（今のイラクあたり）の遺跡から出土した粘土板の中には、「この粘土板を持ち込んだ者には、しかるべき量の麦（ワイン、銀等）を渡す」といった為替手形のようなものが多数残されているそうです。私たちが普段手にする紙幣（「紙の貨幣」）は、中国・北宋時代（九六〇）

（一一二六年）の為替手形から発展したものとされていますので、この粘土板は初期の貨幣みたいなものともいえます。

また、メソポタミアを含む古代オリエント地域から地中海沿岸地域では、銀が秤量貨幣（重さが価値を示し、切り分けて使える貨幣）として取り扱われていました。それらの形は、「コイル」や「輪」の形をしていました（写真1）。

では、私たちが普段頭に浮かべるような金属の「貨幣」がこの地域の歴史に登場したのはいつかというところ、紀元前七世紀頃、現在のトルコのアナトリア地域にあったリュディア（リディア）王国での

写真1 古代メソポタミアのコイル型の秤量銀貨



紀元前 2000 ~ 1600 年頃、イラク・ハファジェ出土（直径 4.7 cm、長さ 22.3 cm）
シカゴ大学オリエント研究所蔵品（Courtesy of the Oriental Institute of the University of Chicago.）

写真3 紀元前5世紀中頃発行の古代アテネのテトラドラクマ銀貨



古代ギリシャの都市国家アテネの守護神であり、知恵・学問そして戦の女神アテナの横顔が使われています。また、都市アテネの守護神の座を海神ポセイドンと争った際に、女神から市民への贈り物とされた平和の象徴であるオリーブ、女神の象徴であるフクロウがデザインに使われています。このフクロウは、近代から現代にかけてのギリシャ国家で何回か採用されました（重量約17g）。

(© The Trustees of the British Museum)

写真2 リュディア王国（紀元前7～6世紀）のエクレトロン金貨



貨幣の価値の象徴としてライオンの頭が刻印されています。これよりサイズが小さくなるにつれ、価値の象徴としてのライオンの体もより小さい部分が使われ、一番小さい物には、ライオンの足1本が刻印されているそうです（11×13mm）。（提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館）

ギリシャ王国で1912年に発行された10レプタニッケル貨（直径21mm）



ギリシャ共和国で1973年に発行された1ドラクマニッケル黄銅貨（直径21mm）



現在ギリシャ共和国で使用されている1ユーロパイメタル貨（2006年発行のもの。センター：白銅、リング：ニッケル黄銅、直径約23mm）



（いずれも個人蔵）

ことでした（写真2）。「歴史の父」とも呼ばれる紀元前五世紀頃の古代ギリシャの歴史家ヘロドトスとその著書、『歴史』（松平千秋訳、岩波書店）において、「リュディア人はわれわれの知る限りでは、金銀の貨幣を鑄造して使用した最初の民族」との旨を述べています。

このリュディアの貨幣は、当初、エレクトロンという金と銀の自然合金でつくられていました（その後、金貨と銀貨が分けてつくられるようになりました）。ヘロドトスの記述と異なり、実はリュディアの貨幣は、鑄型に金属を流してつくる「鑄造」ではなく金属の塊に「打刻」

したものです。その形は、現在私たちの思い浮かべる薄い円盤に打刻したものはかなり異なり、いびつな楕円形や豆のように立体的な形をしています。

主流は少しいびつな円形

リュディアが発明した「貨幣」は、その便利さ故に、古代ギリシャ・オリエント地域に瞬く間に広まりました。その中でも、優良な銀山を持ち、交易やデロス同盟諸都市からの上納金で栄えた都市国家アテネが発行した「テトラドラクマ（四ドラクマ）銀貨」（写真3）は、アテネの国力を反映して、当時の国際貨幣として

地中海世界全体に通用しました。古代アテネの銀貨をはじめとした少々いびつながらも丸い金属板に打刻する貨幣は、その後、古代ローマ帝国や中近東の各国を経て、現在に至るまで標準的な形として伝わりました（写真4）。

写真 4-2 古代ローマ帝国ソリドゥス金貨
(紀元 324 年頃発行)



肖像は、ローマ帝国中興の祖と言われるコンスタンチヌス一世（在位 324～337 年）です（直径 19mm）。
(提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館)

写真 4-1 古代共和制ローマ デナリウス銀貨
(紀元前 137 年前後発行)



ローマを建国したとされる双子のロムルスとレムスにオオカミが乳を与えているという神話に基づく図柄とみられます。なお、この時代のローマの貨幣には、造幣責任者の名が刻まれています。写真の貨幣の右側にも、責任者 Sextus Pompeius の名を略した SEX PO という文字が刻まれています（直径 19mm）。
(提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館)

写真 5 スウェーデンの銅板貨幣（1716 年発行）



スウェーデンは金や銀がそれほど産出しない一方、銅が豊富なことから、金・銀の表示の額面と等しい価値を持つ重量の銅板貨幣を発行しました。なお、18 世紀のロシアもスウェーデンをまねた銅板貨幣を発行しています。額面は 2DALER（重量約 1.3kg、約 21 × 18cm）。
(提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館)

貨幣は何故つくられた？

秤量貨幣から重さが一定の定位貨幣が生まだされた背景について、リュディアに貨幣が登場してから200年ほどたった頃、古代ギリシャ最大の哲学者の一人アリストテレス（紀元前384～322年）が、著書『政治学』（山本光雄訳、岩波書店）で、言及しています。

アリストテレスいわく、物々交換の経済から国家間の貿易へと経済が発展する中、それ自体価値のある銀や鉄が秤量貨幣として登場したとしたり、
「こうしたものの価値は初めのうちは単に大きさと重さによって秤られたが、しかし遂には秤る面倒を省くために、また刻印がそのうえに押されるに到った。何故なら刻印は『どれだけか』の印として押されたから」と述べています。本文中にも引用したヘロドトスの『歴史』によれば、リュディアは、小売制度を始めた国でしたので、商売に便利ようにしたということです。

黄金からお金へ

最初の貨幣の原材料となったエレクトロンは、リュディアに流れるパクトーロス川で産出されたとされます。古代から、この川は砂金をはじめ鉱物資源が豊かな川として知られていましたが、それもそのはず、この川は伝説のミダス王に由来する川なのです。ミダス王は、神から触れるものすべてを「黄金」に変える能力を授かったのですが、食べ物や娘まで「黄金」になるので困ってしまい、その能力を消すために水浴したのがパクトーロス川だったのです。逆に、リュディアの王たちは、その川から、触れるもののほとんどすべてを手に入られる「お金」を手に入れたというわけです。

もっとも、中には、スウェーデンの貨幣のように、大きな銅板に額面を打刻したもの（写真5）や、中世から近世にかけての神聖ローマ帝国内の領邦国家や帝国自由都市の発行する貨幣には、四角形等丸くないものもありました（写真6）。ちなみにスウェーデンの銅板貨幣は、あまりに重くて不便なため、一六六一年、ストックホルム銀行はその代用として紙幣を発行しました。これが、世界最初の「銀行券」とされています（写真7）。

写真6 1/4ダカット金貨



神聖ローマ帝国の帝国自由都市ニュルンベルクの貿易用金貨です。欧州における貨幣は円形が主ですが、このように非円形の貨幣も発行されていました。なお、ダカット（英Ducat、独Dakat）は、東方貿易で栄えたヴェネチア共和国が発行し、品質が良いことで知られたデユカート（伊Ducato）金貨に範をとって、欧州各国で貿易決済用に発行された貨幣の総称です（重量0.88g、縦、横とも約11mm）。（個人蔵）

写真7 世界初の「銀行券」



紙幣には小さくDal.10（10^{ダール}DÄLER）と書かれています。また、今の紙幣にはない発行日付（1666年5月）が入っています（153×187mm）。（提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館）

ドルの起源

22 ページのスウェーデンの巨大な銅板貨幣の貨幣単位が「ダーレル (Daler)」だと聞いて、米国の「ドル・ダラー (Dollar)」に音が何となく似ているなあと思われた方もいらっしゃるでしょう。実は、この二つの貨幣単位は、いずれも神聖ローマ帝国の領邦国家等で発行された「ターラー (Thaler)」銀貨に由来していると言われています。

15 世紀終わり頃から 16 世紀初頭にかけて、現在のドイツとチェコの国境地帯の山々で大規模な銀山がいくつか発見されました。その中に他の銀山を圧するほどの巨大な「聖ヨアヒムスタール (Joachimsthal)」銀山がありました。「聖ヨアヒムスタール」とは「聖ヨハネの谷」という意味です。現在のドイツ語では「谷」は Tal と綴りますが、昔は Thal と綴りました。同銀山のあった場所は、現在、チェコのヤーヒモフ < Jáchymov > という町です。

聖ヨアヒムスタール銀山は 1512 年に発見され、マルティン・ルター (1483 ~ 1546 年) による宗教改革開始から 2 年後の 1519 年より、重量約 30 g、直径約 4cm の銀貨「ヨアヒムスターレル」あるいは略されて「ターレル」と称される高品位の銀貨が製造されました (写真 A)。この「ターレル」銀貨は、欧州内を流通しましたが、神聖ローマ帝国の各領邦や欧州各国はこれを規範としたターレル銀貨 (写真 B) や、より大きい 2 ターレルあるいはより小さい

単位の 1/48 ターレル等、様々な額面の貨幣を発行しました。ちなみに、オランダではダールデル (Daalder) (写真 C)、スウェーデンでは上記のとおりダーレル (Daler) と称されました。

16 世紀 ~ 17 世紀、通商で栄え欧州の覇権国家となったオランダは、現在のアメリカ合衆国東海岸あたりに植民し、ニューアムステルダムを建設しました。このオランダ領北米植民地では、オランダ版ターレル銀貨であるダールデル銀貨が流通していたそうです。

17 世紀後半、第二次英蘭戦争 (1665 ~ 67) の結果、ダールデルが流通していたニューアムステルダムを含む北米オランダ植民地は、英国領となりました (ニューアムステルダムは、その際ニューヨークに改称されました)。この間、南米のポトシ銀山をはじめとした莫大な富を植民地から得たスペインは、本国スペイン、植民地のポトシやメキシコ等でターレル銀貨に相当する 8 レアル銀貨 (写真 D) を製造し、欧州、南北アメリカで「スペインドル」として流通しました。

スペインドルが流通していた英領北米 13 州は、1776 年に英国より独立しアメリカ合衆国となり、同国は、スペインドルを踏まえてドル (Dollar) を通貨単位として採用しました。なお、スペインドルは、19 世紀前半まで米国では法定通貨だったそうです。

写真 A ポヘミア
ヨアヒムスターレル銀貨
(1526 年発行)



製造が開始されてから間もない頃のターレル銀貨です。

写真 B 神聖ローマ帝国
ザルツブルク大司教領ターレル
銀貨 (1620 年発行)



作曲家モーツァルトの生誕地として知られるザルツブルクは、ドイツ語で「塩の城砦」という意味で、岩塩採掘で栄えた町です。現在は、オーストリアの一都市ですが、1803 年までカトリックの大司教によって治められる神聖ローマ帝国内の領邦国家の一つでした。貨幣のデザインにも大司教が描かれています。

写真 C オランダ
ダールデル銀貨 (1609 年発行)



オランダは、毛織物と通商で繁栄していたスペイン領ネーデルラント北部 7 州が、スペインとの 80 年に及ぶ独立戦争 (1568 ~ 1648 年) の結果、成立した国家です (現在のオランダは王国ですが、当初は「連邦共和国」でした)。

写真 D スペイン (メキシコ製)
8 レアル銀貨 (1761 年発行)



アメリカ独立戦争の直前の頃の物です。ドルマーク (\$) は、確かな起源は不明ですが、この銀貨の表面にデザインされている「ヘラクレスの柱」(ジブラルタル海峡の両岸に対峙する岩山) を象徴した 2 本の柱、あるいは柱と巻き付いているリボンからデザインされたといわれています。

(提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館)

造幣局長官ニュートン

産業革命の発祥国である英国では、1660年代に貨幣の製造方法が手打ちから機械に切り替えられました。しかし、その後も、依然として手打ちで作られていたエリザベス一世女王時代（1558～1603年）の貨幣が流通しており、偽造貨幣や貨幣の切り取りがまかり通っていました。そこで、過去の手打ちの貨幣を回収し、一気に機械製造による貨幣に切り替えるプロジェクトが企画されましたが、遅々として進みませんでした。そこに登場したのが、「万有引力」の発見や数学の微積分の創始者の一人である科学者アイザック・ニュートン（1642～1727年）でした。

ニュートンは、1696年に造幣局の監事（後に長官）に就任すると、貨幣の製造現場に自ら足を踏み入れ、本職だった科学研究に負けず劣らずの熱心さで観察・調査しました。その結果に基づき、作業員が安全かつ効率的に操業できる体制を構築し、あわせて設備の大規模な更新を実施しました。そして、大規模プロジェクトは短期間で成功裏のうちに終了しました。

ちなみに、ニュートンは、造幣局に権限があった貨幣偽造の犯罪捜査にも熱心に取り組んでいました。被疑者の取り調べを自ら行うだけでなく、犯罪関係者と接触したり、贖金づくりをやっていた職人を自費で雇って犯罪組織や刑務所に潜入スパイとして送り込み、贖金づくりのボスを摘発するなど、こちらの方面でも成果をあげました。

写真8-1 手打ち式／エリザベス一世女王(在位 1558～1603年)
1 シリング銀貨 (1561～1566年発行)



(© The Trustees of the British Museum)

写真8-2 機械式／エリザベス二世女王(在位 1952年～現在)
1 シリング白銅貨 (1970年発行)



(個人蔵)

英国は1ポンド=100ペンスという貨幣単位を1970年より採用し、現在、シリングという単位は存在しません。10進法の貨幣単位を採用する以前は、下記のような複雑な貨幣単位を使用していました

- 4 ファージング= 1 ペニー（複数形は「ペンス」）
- 12 ペンス= 1 シリング
- 2 シリング= 1 フローリン
- 5 シリング= 1 クラウン
- 20 シリング= 1 ポンド
- 21 シリング= 1 ギニー

より安く、より大量に、
そしてより均一に

中世を経て近代になると、欧州の打刻貨幣の製造現場では大きな変革が起きていました。それは、機械の導入です。

一六世紀終わり頃から貨幣の製造現場に機械が導入され、それまでの職人による手打ちから機械による製造へ移行しました（写真8）。さらに当初は人力、馬、水力を使用していましたが、最終的に蒸気機関が用いられるようになりました。

移行の背景には、機械式のほうがより安く、速く、大量の貨幣を生産できることもありました。より均一の形・デザインに製造されることで偽造が難しくなるほか、均一できれいな円形の方が、貨幣の縁を切り取って地金として利用することも困難になる（見た目で分かりやすい）という理由もありました。

今回は、古代から近世にかけての東洋の貨幣の形についてご紹介します。